

私達の言葉 数値予報でなければ今後の予報は解決されない。数値予報的解析でなければ発展する解析は望めない。このような言葉はこの頃よく耳にする。所がなぜそうでなければならないかということについての根拠を明確に教示してくれる人がいない。このことを明らかにすることは、地方で予報現業にたずさわっている者にとって非常に参考になる。この事は一つどなたかが取上げて実現していただきたい。

なお、これに附随して、数値予報的解析とはどんなものを指しているのか、総観解析との違いはどこにあるのか、この点についても具体的に教示して欲しい。急展開しつつある理論気象学の、その予報への応用は誰でもが容易に理解されるというような姿よりはむしろ、気象学者と予報技術者、中央と地方との間のギャップをますます大きくして行こうとする傾向にある。

理論気象学的研究のみが予報を進歩させるのだという考えにとらわれて、われわれは何をしても趣味的なものとしかならないと悲観する向きもある。このような迷える羊に対して救いの手をのべてくれる人の出現を心から望むものである。言ってみれば、気象学の啓蒙的な事業を出来れば学会で取上げて下されば幸である。

(M生)



セリエのストレス学説によらなくても、現代社会に生活するわれわれが、大なり小なり心理的あるいは、社会的なストレスを受けていること、こうしたひびくみは色々の方面にあらわれて、機械にたとえれば、油のない回転軸のように自分をすりへらしている。夜も日も勉強をしたり、病気をしておして研究したりする精神も、もとをただせば、たしかに、かなり単純な、しかも個人的な動機から出ていることが多い。

しかも、こういう苦学や苦行が、何か非常に立派な、普通の人とはちがった、超人的なシンボルのように語られるのは、少々こっけいじみている点さえある。しかも科学者が自分の体について最も科学的にかつまた大切にするとする基本的な出发点については忘れられている。

自分を大切にしないから、したがって人も大切にすることはできない。こうした研究態度の持主が口では民主的なことをいいながら、いたってファッション的な行動をとるのは故なきことではない。

大切なのは、誰のために、何の目的で体をはるかということではないだろうか。(αΩ)

寒冷地とはどういう土地か サラリーマンには俸給の話がつきもの。そして俸給には寒冷地手当がつく場合があり、問題は寒冷地か否かの境目あたりの人達の話題。とくに測候所付近がうるさい。いわく、「オレのところは、日平均気温は高いけれど、盆地だから朝が冷える。最低気温の平均で基準をつければ当然寒冷地だ。」あるいはいわく、「(これは日本海岸のある場所で、)「ここは海岸に近いから日平均気温は比較的高いが、オ陽さまが出ないから晝間うすら寒い。われわれが働くのは日中だから、働いている時間の平均気温で基準を出してもらわなければ困るヨ。」またある島では、「まわりが海だから、気温は割合高いが風がモノすごく強い。体感気温という科学的な基準があるんだから、アレでやって欲しいものだ。」さアこうなると、どこもこれも寒冷地になってしまう。しかし、上の考え方のどれも間違いとはいえない。つまり気候学的に寒冷地を決定するのは、生活気候学の簡単な応用問題のようだが、実は、かなりむずかしい問題である。冬、雲の多い天気は牛乳や新聞の配達子には喜ばれるが、重役出勤する人には大いにきらわれる。労働の時刻と時間と場所のいかんによって、同じ地点でも寒冷地になったり、ならなかったりするのあたりまえであろう。そしてさらに重要なのは労働者の生活そのものである。(No. 44)

煙が出てからではおそすぎる 都市の大気汚染としての煤煙がやかましい問題になっているが、その実態はまだつかめていない現状のようである。煙突から出る煙はしばらくすると、その濃度が均等になるような感じを受ける。しかし飛行機などで直接しらべてみると、そう単純なものではない。一本の煙突から出る煙は煤煙雲を形成してかなり長い間、周囲の空気とまざりにくい性質を持っているものらしい。煙突一本一本から煤煙雲ができるとすれば、都市上空の煤煙の実態はおそろしく複雑なものとなっているであろう。このように大気中に拡がった煤煙汚染がどのような過程をへて降下し、ふたたび地面にもどってくるかを考えると、重力降下、下降気流、降水滴による捕捉、煤煙粒子凝集等等があり、どの現象もそうかん単ではない。煤煙が発生してから降下するまでの一生をつかみ、ついでその清浄対策を立てなければならぬ。一連の煤煙の生涯をかえりみてわかるように、煙突から煤煙を出してしまってからでは手おくれであるのに気がつく。どうにかして、煙をなるべく出さないようにするのが先決である。コトトレル集塵装置を取り付けるとか、炭質を変えるとか、火床で完全燃焼をさせるとか、いくつかの改良すべき問題がある。全く同じことが放射能大気汚染についても言える。大気を汚染してからではあまりにもおそすぎる。(I)